

斑点米カメムシ類の発生が多くなっています

～昨年発生の多かった地域や常発地では特に注意して下さい～

[現在の発生状況]

- ① 7月上旬現在、水田における斑点米カメムシ類の発生地点率は平年より高く、すくい取り虫数は平年より多い。特に県央地域で多い発生となっている(表1)。
- ② 7月上旬現在、水田におけるクモヘリカメムシ(本県で最も大きな被害を及ぼす斑点米カメムシ)の発生地点率は平年よりやや高く、すくい取り虫数も平年よりやや多い(表2)。
- ③ 7月上旬現在、水田周辺のイネ科雑草における斑点米カメムシ類の発生地点率は平年より高く、すくい取り虫数は平年より多い(表3)。特にカスミカメムシ類の発生が多い。
- ④ クモヘリカメムシの今年の産卵開始時期は、平年よりやや早いと予測される(7月11日現在。クモヘリカメムシの発育に有効な気温の積算値から算出)。
- ⑤ 気象予報(7月12日発表)によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

表1 水田における斑点米カメムシ類の地域別生息状況(平成25年7月上旬調査)

地域 (調査地点数)	発生地点率(%)			すくい取り虫数(頭/10回振り)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
県北 (8)	13	10	4	0.67	0.37	2
県央 (15)	47	11	1	0.87	0.17	1
鹿行 (6)	0	12	6-11	0.00	0.13	6-11
県南 (19)	11	9	5-6	0.11	0.10	5-6
県西 (9)	11	8	3-4	0.14	0.06	6
全県 (57)	19	10	2	0.37	0.17	2

1) 平年:平成15～24年までの10年間の平均値を示す。

2) 順位:過去11年間における本年値の順位を示す(6-11は6位から11位まで同じ数値であることを表す)。

表2 水田におけるクモヘリカメムシの地域別生息状況(平成25年7月上旬調査)

地域 (調査地点数)	発生地点率(%)			すくい取り虫数(頭/10回振り)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
県北 (8)	13	7	3	0.61	0.32	2
県央 (15)	20	5	1-2	0.23	0.10	2
鹿行 (6)	0	8	4-11	0.00	0.09	4-11
県南 (19)	5	2	3	0.05	0.02	2-3
県西 (9)	0	3	4-11	0.00	0.09	4-11
全県 (57)	9	4	3	0.17	0.11	3

1) 平年:平成15～24年までの10年間の平均値を示す。

2) 順位:過去11年間における本年値の順位を示す(1-2は1位から2位まで同じ数値であることを表す)。

表3 水田周辺のイネ科雑草における斑点米カメムシ類の地域別生息状況(平成25年7月上旬調査)

地域 (調査地点数)	発生地点率(%)			すくい取り虫数(頭/10回振り)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
県北 (6)	100	59	1	14.5	6.0	2
県央 (14)	86	61	2	10.1	12.1	3
鹿行 (6)	83	66	2-3	9.7	5.1	3
県南 (11)	100	63	1	36.5	6.3	1
県西 (7)	86	64	2-3	7.6	9.7	5
全県 (44)	91	63	1	16.8	7.8	2

1) 平年:平成15～24年までの10年間の平均値を示す。

2) 順位:過去11年間における本年値の順位を示す(2-3は2位から3位まで同じ数値であることを表す)。

[防除対策]

- ① 水田周辺のイネ科雑草は、カメムシ類の生息場所となるので除草に努める。ただし、出穂期近くになってからの除草は、カメムシ類を水田内へ追い込むことになるので、水稻の出穂二週間前までに終わらせる。
- ② あきたこまち等の早生の水田では、成虫の飛来が集中する恐れがある。また、その他の品種についても周辺より出穂の早い水田では注意する。
- ③ 斑点米カメムシ類の成虫を対象とした防除適期は、穂揃期である。穂揃期に成虫を確認した場合は防除を実施する。
- ④ 斑点米カメムシ類の幼虫を対象とした防除適期は、出穂 10～15 日後頃である。斑点米の発生を防止するためには、特にこの幼虫防除が重要である。
- ⑤ 収穫の遅い水田では、新成虫の飛来により 8 月中旬以降にカメムシ類の密度が高まることがあるので、十分注意する。
- ⑥ 防除薬剤は表 4 を参考にする。防除の際には収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。

表 4 稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤 (平成 25 年 7 月 10 日現在)

薬剤名	希釈倍数(倍)	収穫前日数- 剤の使用回数	有効成分- 有効成分の総使用回数
アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 [○]	2,000	7-3	ジノテフラン-4 ¹⁾
キラップフロアブル [△]	1,000～2,000	14-2	エチプロロール-2 ²⁾
スミチオン乳剤 ^{※△}	1,000	21-2	MEP-3 ³⁾
MR. ジョーカーEW [□]	2,000	14-2	シラフルオフエン-2

1) 育苗箱への処理及び側条施用は合計 1 回以内、本田での散布、空中散布、無人ヘリ散布は合計 3 回以内

2) 移植時までの処理は 1 回以内、

3) 種もみへの処理は 1 回以内、育苗箱散布は 1 回以内、本田では 2 回以内

※市販の薬剤の中には稲に登録のないものがあるので、確認のうえ使用すること。

○同一の有効成分で空中散布、無人ヘリコプター散布、ブームスプレーヤー散布で登録がある剤がある。

△空中散布、無人ヘリコプター散布、ブームスプレーヤー散布でも登録がある。

□無人ヘリコプター散布、ブームスプレーヤー散布でも登録がある。

注) 農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項等を確認のうえ、周辺作物への飛散に留意して使用する。また、育苗箱施薬、有人ヘリ防除または無人ヘリ防除を行っている場合は、本剤の使用回数ならびに有効成分の総使用回数に十分注意する。